
神様の頂点～創造主になってしまった少年～

りょう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の頂点／創造主になってしまった少年

【著者名】

りょう
N N G - D

【あらすじ】

何故か死んでしまって 後藤 優（こうとう ゆう）は、力を秘めていた為、神の頂点 創造主にならなくてはいけなくなった…

世界を作つて、いろいろやつてしまします。
漫画の力でも何でも出来てしまう主人公です。

俺は死んでしまったからしい。

俺も何で死んでしまったか分からない。

後藤 優 として生まれて16年充実していく平凡な人生だったと思う。

まあ、この姿でいろいろ有ったが・・・変な女にストーカーされたり（告白できずに影から見ていただけ）喧嘩吹っかけられたり（逆恨み）は、したが自分なりに充実していたと思う。

なのに何故？？？？？？？？？？？

「ハハはビ」だ？

ただ真っ白い空間・・・

「学校から帰つていつも通りに過ぐし、就寝しただけで、

こんなところには、居なかつたはずだ。」

「？」は、神の生まれる空間です。」

いきなり声が聞こえてきた。

声のする辺りに振り向いてみると、そこには男が一人立っていた。

「ルリが神の生まれると」だと?「じゃあ俺は何故ココにいる。」

「? ? ?」それは、お前の生まれ持つた力が強すぎて、力が覚醒したと同時に

死んでしまったんだ。そして、力が強いお前は、神になるためにココに

「つまれてきたのだ。」

「じゃあ、俺は死んだと言つことか……」

「? ? ?」「そうだ。」

？？？俺の考えたることをよんだ？

？？？「当たり前だ。俺は神 ゼウスだからな。」

「マジで？」

「ゼウス」「おう！しかしお前はすごい力持ってるな。」

「？？？？すごい力？」

3話　頂点になってしまった（^3^）Hへ

-----ゼウス視点-----

「今まで力が強いとは、思わなかつた。

全ての神を合わせても勝てんだろうな・・・

ゼウス「そうだ、コウはかなり強い力があるのだ。本来なら初めから

神、いや・・・創造主、神の頂点に立つはずであつたのだが、

何故か、人間として生まれてしまった・・・

人間として創造主の魂は、人間の肉体には強すぎたのだ・・

だから、死を迎えたのだ。」

じゃあ・・・俺が死んだのは、仕方がなかつたんだな・・・

「じゃあ。これから俺はどうしたら良いんだ?人間としての肉体もない。

それに神の力も使い方が分からない・・・いくと来ないぞ。」

ゼウス「大丈夫だぞ!お前には、本来なつてもらはずだつた創造主になつてもらづ。

扱う力の使い方も、俺がお前に教える。」

「まじで?」

ゼウス「オウ! 創造主になると云う事は神の頂点に立つのだ。

「俺の上司になるのだぞ。」

ゼウスの上司か・・・なんか不思議な感覚だな。まあ、俺の魂の力とやはりは、

チートなんだろ？。やるこどもないし・・・やつてみるか（^_^）

ゼウス「コウの考えも纏まつたみたいだし、力の使い方でも教える
か（^_0^）」

「よろしく頼むぜ、ゼウス」

「ゼウス」おひ

4話 進み早くなれ？？(> x < -)

あれから大変だつた・・・・・

創造主の力は、頭に思い浮かべたり、世界を作り生き物の種を作り

どの様に進化せぬか、創造・・・思い浮かべていかなくては、

ならない。

コントロールするのに一年ほど使った。

・・・・
「ゼウス「・・・・お前・・1年で神の力のコントロールするなんて・

「? ? ? ? ? ? ?」

ゼウス「普通、1000年ぐらい掛かるもんだぞ!」

「…………マジで？」

ゼウス「…………まあ……いい。これから創造主の間に
行つてもらい

世界を作つてもらひ。前の創造主が死んでしまつてから50
000年は

世界が作られてなくて、神達が暇していたのだ。みんな力ナ
リお前が作る

世界を楽しみにしていろが

・・・創造主つて死ぬのか???????

「なあ・・・ゼウスなんで前の創造主は死んだんだ??????????

神つてそんなに簡単に死んでしまうのか???????

ゼウス「・・・前の創造主は、全ての自分が作った世界を壊そようと

したのだ・・・

「つな！－何で世界を壊そりとしたんだ？？？自分の作った世界なら自分の子供だろ。」

ゼウス「それが・・・自分が寝てる間に神の信仰が無くなつた世界があつたんだ・・・

それを起きた時知つた、前の創造主は・・・全てを壊そうとしたんだ。」

「そんなの自分勝手極まりないじゃないか！」

ゼウス「ああ・・・だから全ての神で創造主をこじらしたのだ・・・

「

「まあ・・・そんな理由なら仕方がないな・・・その創造主が滅ぼそうとした

「世界は、今はビービーしているんだ??.?.」

ゼウス「今でもあるだ。ナギとか言つ奴が創造主の力を殺いでくれたからな、

そのお陰で我々が創造主を倒せたんだがな。」

ナギ・・・ビニカで聞いた」とある・・・・・!――

「その世界、ネギまじゅねか! 漫画の世界もつくれるのか?..」

ゼウス「オウ。作つて大丈夫だぞ、それ..・・作つた世界に行くことも可能だ。」

「よつしゅーーじゅあ世界作つまくるだー。」

「作つた世界は神達が書類整理や異常が有つた時は教えたくれるんだつたよな?」

「ゼウス」「オウ。 さうだぞー! 僕は、お前の秘書みたいなもんだな。」

「そうか(^〇^)じゃあ、これからよろしくなゼウス」

「ゼウス」「おっ

5話 頑張つて作つているや ・・・しかし疲れた・・・

あれから、俺の部屋（創造主の間）に行き世界を作つた・・・

マジで大変だつた・・・星を作りそこに、水やマグマ火山に、太陽や月

を作つた。

そしてそこに微生物の種を植え付け、進化させ魚などを作つた・・・

人間作るのに、時間が掛かるため世界の速度を速めたりした・・・
(反則だよな)

いろいろな漫画の世界を作つたりもした。

ナルト・ワンピース・悪魔を作つてべるぜバブ・リリカルなのは・
などなど作った

ゼウスには、呆れられたが・・・日本人なら作るべきだろ！

後悔はしていない。自己満最高（^_3^）▼

幾つかの世界を神達に、見守らせる段階で、困った事になつた・・・

「ゼウス・・・それホント?????」

ゼウス「ああ・・・神達が世界の取り合いをしている・・・

「うへへへへん・・・なんでそうなるの??結構世界作ったよ
?????」

ゼウス「それがだな・・・神達は、日本人の創造力にビックリしてな・・・

……

「ここへここんだが、漫画や小説……アニメを覗く見るのは……

そのせいで、誰がどの世界か喧嘩しているんだ。」

日本人のアニメや漫画は凄いもんな……俺も自分が好きだった
しな……

「へ~~~~~ん……びついたもんか……

……好きに選ばせるから喧嘩になるんだろう……

「なあ……ゼウス……みんな集める」としてできるか……?

「ベジ弓で決めようつかと……

ゼウス「……ちつかぬか……このままじゃあ、埒があかん……

・

クジ大会

「え~~~~~。これから誰がどの世界を担当するかクジで決めたいと

思います」

「~~~~は~~~~~い」「~~~~」

良い返事だ」と

「じゃあまづ……これから一つひとつ見て貰います。その数字の順番順に

世界の玉を引いてもらおう。その世界が自分の担当する世界になります。」

「どんな順番になつても何処で自分がほし世界が出るか分からな
いから

みんな平等です。それで文句は無いですね」

「…………」「…………」「…………」「…………」「…………」

良い返事だ。一様脅しておぐか・・・・

「もし・・・喧嘩なんかしたら・・・分かってこるよね」

（（（ブルブル）））「「「「「「まー」「「「「」

そうして決まった。

6話（前書き）

神様たちの名前が思いつかない・・・・

てか・・・・わかんない（^ - ^ -）

誰か教えて・・・・そのうち番外編で誰がどの世界か書きます。

あれから500年ほどたつた。

「なあ・・・ゼウス」

ゼウス「なんだ? 何か悩み事か?」

「おれが作った世界順調にいってるみたいじゃん・・・」

ゼウス「ああ。うまく言つてるな。それがどうした?」

深刻そうに言いつ・・・

「俺・・・初恋も、初恋人も・・・まだ、だつたんだ。」

ゼウス「え? ? ? ! お前その顔でまだだつたのか? ? ? ?」

「ああ・・・やつぱり・・・恋人ほしい・・・」

だって、ホントほしい・・・寂しいじやん。

ゼウス「じゃあ、100年ぐらい世界に行ってくれるか・・・」

「いいのか?」

ゼウス「おう!その代わり、みんなに理由とか言わないと行けない
が・・・」「いいぞ」

それに、何か有つたら連絡するけど・・・

「全然OK!」

彼女ゲットの為なら何だってするぜ!!~~~~~＼

-----後日-----

ゼウス「…………つと三つわけなんだ」

アテナ「ユウ君、彼女いなかつたの？ てっきり 居るもんだと思つてたから……」

「いなくて、悪かつたな……（ふて腐れ）」

アテナ「違うわよ。からかっているんじゃないの……居ないと分かっているな」

わたしなんてどう??.?.?.?.?

ゼウス・俺「「はあ?????????」」

アテナ「だって、前から狙つてたのよ・・・だも、居ると思つてい
たから・・・」

「とりあえず・・・作つた世界に行つてくるわ。それで、アテナのことも考えとく・・・」

アテナ「ホント？？？」

「ウサギ」

アテナ「やつた～～～～～～～～

ゼウス「考えるだけって言つてはいるだけだ。」

• •

アテナ「分かつてゐるわよ」

- - - - - 話しの後――――――

ゼウス「本当にアテナのこと考えとくのか?」

「そのつもりだけど?????」

どうしたんだ?????

ゼウス「アイツだけは、やめとけ?????」

「…………」

ゼウス「…………昔…………アイツと付き合つた人間が居たんだが……

「

「…………」

ゼウス「初めはつまくいってた…………でもある日男が仕事のこと

職場の女と話してるのを見て、嫉妬して凄かつたんだ……

凄すぎでどういったらいいか分からぬ…………

ただ言えることは、男が死ぬまで他の女とは話せなかつた……

兄弟や子供、職場のものも全てだ……」

「…………」

それって……かなりやばくなえ？…………

「どうあれ、……我だけにして……」

ゼウス「やうじとか……俺でもあの状態のアテナは、止めるこ
とができるな……」

「ひいて、アテナとのひとせなくなつた。…………。

ノンノン

ゼウス「ユウ入るわ。」カチャ

ゼウス「……………ユウ向やつてこむんだ……？」

今世界を水晶で覗いていた。何処行くか悩んでるんだよな……
何やつてるか?だつて……じの世界に行ひつか悩んでいる俺は、

「何つて世界を覗いてた。何処行くか悩んでるんだよな……
ゼウス「だからいつ……そこ」を覗く必要あるのか?……

？？？男なら覗くべきだら、馬ならあそこを覗く」とと

透明人間になつて色々やる事とか憧れるだろー。

ゼウス「まあ・・・確かに気持ちは分かるが・・・」

「まあ良いじゃないか」

ゼウス「はあ＝3・・・」

ゼウス「とこで、いい加減決めたのか？」

「へへへへん・・・・・・」

悩んでるんだよな・・・ネギまもいいし・・・リリカルもいい

・・・ワンピースも良い・・・でもな～～～～～～

「前に」、漫画とかの世界じゃないとこ作つたじゅん。あそこにして

うかな～～。」「

ゼウス「漫画じゃないのか? ノウは、神だから世界を無に返さない限り何しても

大丈夫でぞ?」

「漫画の世界は、いつでも行けるしな・・・それに、知らないほう
が面白いし」

ゼウス「まあ、そりだな・・・」

ゼウス「そうそう。もし恋人が出来たらノコに連れて来ても良いか
らな」

????? 神様にでもなるのか?

ゼウス「違う! 死ぬまでは、あっちの世界についても構わないし

「ノコに連れて来ても良い。死んだ後もノコにこられるよう

神の伴侣

わざわざんだ。・・・まあ眞実の愛の場合のみだがな・・・

「

「ちづか、じゃあとこあえず・・・・」の世界にいつてくるわ

ゼウス「オウ！分かつたよ。良こそ見つけて来いよ

ゼウス「まあ・・・せき合こむ無いからな　・￥￥￥￥￥￥」

ゼウス視点

行つたか・・・・

「しかし・・・ユウこれ分かつて行つたのか?・・・・」

そう・・・ユウの行つた世界の書類にわ・・・・

世界名

アクア

世界に住む住人

魔王・悪魔・精霊・ウルフ・吸血鬼・魔獸・・・など

この世界の信仰の神

ユウ

「気づいてたら、アイツなら行かないな・・・しかもあっちの世界じゃ・・・・・

アイツの顔もろバレだぞ・・・・・・まあ・・・いいつか

ハーレムでも作るだろ?。」

そうユウは、気づいていなかつたのだ・・・

その世界では、コウを信仰の神になっていた・・・・しかも・・・・

この世界を担うる神は、コウを憧れ・・・・この世界に肖像画まで

作って信仰を増やしていたのだ・・・・・・

7話

この世界がいいかな~~~~~。（後書き）

やつとい、異世界に行きます。

時期をみて漫画の世界も書きます。

――ドスン――

「やつと着いたか・・・って何で泉?しかも木しかないし!・・・

ホント・・・森しかないし。

「とりあえず、現在地と首都でも詮索するか・・・・・」

「『から』キロのところ、デカイ首都があるな・・ってかこの泉つて・・神の降り立つ泉だと！」

・・・・取り合えず・・スルーだな。

「『から』のまま居ても埒あかないし・・・首都の方にでも行くか。」

――その頃、王都では・・・

王「強い力を持つものが森にいるな・・・しかもこっちに向かっておる・・」

爺「どうされますか?」

王「目的が分からぬ……取り合えず町の警備を増やせ!」

爺「はあ……」

侍女1「恐れ入ります。」

王「//こーよ。どうした?」

ミコー「申し上げます。姫様が……また、城を抜け出されました。

「

・・・・・わが娘ながら何とも御転婆・・・・・

王「わかった……兵士に伝えよ!。」

ミリー「わかりました。失礼します。」

ふう・・・・・

こんな時に、わが娘ときたら・・・・・

頭を抱える王であった・・

-----姫視点-----

今日も城を抜け出してきた

「チヨロイ・・・・」ニヤリ

しかし・・・暇だな／＼・・・・・・・・

「よし町外れのあそこにも行って見ようかしら。」

あそこは、花が咲き乱れていて綺麗だから・・・

-----その頃-----

しかし、森しかないな・・・

「おつー・やつと開けた場所に出たか・・・公園で休むか・・・う

ん?」

休もうとしていた時……なんか気配が近づいてきた。

精靈か?

精靈 <始めて、創造主様我々はこの世界の精靈でございま
す。>

「お前は、精靈王か……よく俺が創造主だと分かったな。」

精靈王 <はい。この世界の管理をする神より、あなた様事は聞
いております。>

「なつか。」れよじ100年ほどこの世界の世話をなるからなよ
しくな

精靈王 <はい。コウ様がこの世界に来てくださいて嬉しいです。

>

「ハク。・・・ヒーハー前は可だ？」

精靈王 <我々精靈には名前はいりません。>

「やうなのか？・・・じやあ俺が付けてやるよ。」

精靈王 <ほんとどうぞますか？（嬉）>

「おう。・・・じゃあ・・・ハクと呼んで下さい。」

ハク <あつがどうぞます。>

「良じつて。口口で少し休ましてもいいつた。

ハク <はい！お好きなだけいてください。>

「ありがとうな
」

• • • • • Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z • • • • •

9話 姫様と出会ってしまったよ～～・・・

――姫――

お気に入りの広場に来たのですが・・・

男の人寝てます・・・どうしまじょう(・ー・・)

取りあず・・・近づいてみますか・・・

―― - - - ュウ――

俺が気持ちよく寝ているのに誰か近づいて来たな・・・

まあ・・・殺氣も出てないし・・・大丈夫だろ・・・ZZZZZ

姫

知らない男性に近づくのは、危険なのは分かっていますが・・・

「つな！・・・このお方は・・・神・・・」

ユウ――――――――――――――

煩いな・・・気が散つて寝れない・・・

起きるか・・・・・まあ = 3・・・

ムク

「・・・ふあ・・・・よく寝た・・・」

気配の匂いを振り向いてみると・・・

身なりの綺麗な子だな・・・もしかして良いこの子か?

スタイルもいいし、顔もかわいいな・・・・・・・・・・・

よし声でもかけるか・・・・

「なあ?そこの子・・・・

姫「…………へ？…………」

「？？？？？まあいいや、名前何で言つんだ・」

アリス「つえ？？？ハセガワ・D・アリスでしゅ…………」

この子…………ドジッ子か？？？まあいいつか…………かわいい
し…………

それにしても…………ハセガワって…………まあ俺が作った世界だか
ら名前が

日本よりになるのは、いたし方ないか…………

(ゼウス「声でいるぞ~~~~~。」「

「？ゼウスか？俺声出てた？」「あひ……アシテ」

アリス「やはり、神なのですね・・・伝承とおりのお姿なので・・・」

伝承？？？？？

「伝承つて何だ?????」

アリス「神殿にあるあなた様の肖像画です・・・」

「オイ。ゼウス……どうせ聞いてるんだろ?！」

ショーン

ゼウス「呼んだか？」

「どうなってるんだ????? 何で俺の顔がばれている!」

ゼウス「…………あまり・・言いたくないん
だが・・・

「」を担当する神が・・・お前のファンだ・・・・・・。

」

ファン？？？？？

ゼウス「お前・・・気づいてなかつたのか？？お前、神々に人気が
あつて

イツ
ファンクラブがあるぞ・・・しかも、そのの念願は ア

だぞ・・・」

アイツ？？？？？

「まさか！」

ゼウス「・・・そのままかだ。」

「……………はあ＝3・・・

ココの恋人探しは、あきらめるか・・・・・

ゼウス「ココで、恋人探しなら・・選びたい放題だぞー。」

「……………ん・・・・・

アリス「……………。・・・・・

・・・ん？

「何だ？」

アリス「恋人探しに来られてのですか？」

「そうだが？」

ゼウス「そうだぞ。コイツ仕事ばっかりやつてたから、今まで恋人
が居なかつたんだ。」

「居なくて悪かつたな・・・・・・」

ゼウス「誰も、悪いなんて言つてないだろ。」

アリス「なら一いつかの城に来てください。」

「…………なんで?」

アリス「それは…………」

ゼウス「ははあん…………そここの姫さんは、お前に惚れたんだと。」

「…………そりなのかな?」

アリス「…………はい。…………」

「…………どつするか…………」

「取り合えず、アリスの事何も知らないから、アリスの事知つてから返事するな。」

「アリス」では……うちに来て下さるのですね?—

「ああ。世話になるな。」

ゼウス「では、俺は帰るからな。」

「おうー!」めんな、迷惑かけて……

ゼウス「今まで、休まなかつたんだから100年ぐらい大丈夫だ。」

まあ・・・何か有つたら書類持つてくるから。」

・・・・書類・・・・ゼウスやってよ・・・・・

ゼウス「・・・最高神のお前にしかできないだろ。・・・」

・・・・セうだけじや・・・・・

ゼウス「まあ・・・頑張れ。・・・・・」

「・・・わう・・・・・・(泣)・・・

ゼウス「じゃな・・・」

ショーン

アリス「では、いきますか。」

「ああ。」

1-0話 みんな集めたるし・・・（泣）

俺たちは、あれから2人で王都に行く道を歩いてる・・・

「・・・・・・・・・・・・

アリス「・・・・・・・・・・・・

ううへへへん・・・・

「そりいえば、俺アリスに名前言つてなかつたな。」

「俺の名前は、後藤 優だ。ユウと呼んでくれ。」

アリス「ユウ様ですね。」

「様もいらないけど・・・まあいいっか。」

「そういえば、アリスって城とか行ってたけど・・・良いところの子？」

アリス「私は、この国 イタリアーナ 国の第一皇女です。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「まじで？」

アリス「はい。」

「じゃあ、俺いつてもいいのか？・・・だつて怪しいだろ・・・」

アリス「大丈夫ですわ。ユウ様のお顔を知らない者などこの世界にはいませんから。」

・ ・ ・ ・ そんなに、俺の顔有名なのか・ ・ ・ ・

アリスト「着きましたわ。」

・ ・ うん？ ・ ・ ・ もう着いたのか？ ・ ・

くく首都正門・検問所>>

兵士1「姫様探しました。力の強いものがこちらに向かっているので、早く城に

お帰りください。・ ・ ・ ・ ・ ！ ～ ～ ～

かし・・
「姫様、このお方は？？？・ ・ ・ まさか・ いや・ し

「アリス、『コウ様です。きっと力の強い者とは、コウ様の事でしょう。』

力が強くて当たり前ですわ！だって神なのですから……」

「そんな事はいいですわ。城に行き父に会わなくてはなりませんから

「コウ様行きましょう。」

兵士1 「…………神が下りられた…………神殿にお伝えしなくてわ

こうしてユウガ世界に降り立つことが、世界中に伝えられたので
あつた・・・・・

11話 泣きたくなる。。。

あれから・・・城前に来るまでの町での道のり・・・・(泣)

なぜなら・・・

出会う人の反応・・・

俺の顔を見て、驚き泣き出すもの、ひれ伏す者・・・固まるもの・・・

泣きたくなつて来た・・・・。(泣)

アリス「ユウ様、着きましたわ。」

・・・・・せつと・・・あの目線から逃れられる（泣）

「セツカ・・・・・

門番1「姫様、また抜け出して…城の警備兵が総出で探しているのですよ…」

門番2「…・・・あの～～～・・・姫様…このお方は…・・・

・・・・・まさか・・・・・

門番ズ「「「まさか、神コウ様」」」

・・・・・・・・・・・

「まさか！アリス、俺の名前も有名だったりする？」

アリス「・・・・・言ひこくいのですが・・・はい。・・・

・・・・・泣・・・・・

アリス「・・・コウ様お気をたしかに・・・参りましょ。」

「そうだな……口で考えていても仕方がないしな……アリスの父に会いに行くか」

アリス「そうです」

――――ゴウ達が去つた門番達の会話――――

門番1「す、」かつたな……

門番「そ、うだな・・・・・」

門番3「伝承通りのお顔で、美しいお顔だつたな」

門番ズ「「「そうだな。」」」。

門番4「とにかくでさ・・・・コウ様は何でこの国来たのかな?」

門番2「姫様と結婚するためとか?」

門番4 「そつなのか？」

門番1「でもそつなつたが、この国の王族は、神の血を受け継ぐ事

こうして、城でのコウとアリスくつ付け作戦が発令されたのであつた。

門番ズ「「「それ、いいなー」」」

門番5「・・・メイド達にも協力してもらえば・・・」

門番2「やうだな・・・」

門番4「じゃあ、姫様に頑張つてもらわなくてわー！」

門番ズ「「「それ、いいなー」」」

1-2話 王様？王妃？最強？

今……俺は王の間でいる……しかも、何故か貴族やもひもひ居る……

俺見せ物…………（泣）…………

アリス「父上、ただいま戻りました。」

王「ふむ……無事でよかつた。」

王妃「良くありません！ あなたも少しあはしつかりして下せー。」

王「…………すまん…………」

王妃「アリスもですよ！」出かけるならキッチンと書いて行きなさい

アリス「…・・・・だつて・・」

王妃「だつて、ではありません。」

王とアリスへの説教10分

俺
・
・
・
空氣?
・
・
・
・
・
・
・

王妃「ところで、あなたは？ 神の肖像画に瓜一いつだけど・・・」

アリス「このお方は 神なので 「あなたは黙つていなさい」・
はい。・・・」

もしや・・・この国の最強は・・・王妃？・・・・・・

「俺は、確かに神だな。」

――ザワ――ザワ――ザワ――

「？」「神だと・」

「？」「本物か？」

? ? ? ? 「神が この地に降り立たれたのか ・・・・」

結構いろいろ言つてくれてるな ・・・・・

王妃「静まりなさい！」

シ――――――ン

やつぱり、この国最強は、王妃だな・・・・王でなく王妃と話した方が良いな・・・

王妃「あなたが神だとして、何しにこの世界に降り立つたんですか？」

「まあ・・・俺、神なんだが」 まだ独り者でな、仕事のし過ぎで

恋人も居なかつたんだ・・・まあ、早い話・・・言いたくないの
だが恋人もしくは、妻探しの旅

だな「

さわざ

？？？？？「何だと！ではわが娘と結婚してもらえば・・・神の血
が・・・うふふ・・・」

? ? ? 「うちの娘を・・・」

どうして、こんな事になつた・・・

始めは・・・ただ恋人がほしかつただけだ・・・

1時間前

王妃「ユウお前が、神だと言つ証拠は何かあるか?」

証拠ね
・・・・・

証拠と言わされたので、

パン

「これでいいか？」

鋼の鍊金の技・・・アレ良いよね

神になつてすぐにヤツチャツタ

――ざわざわざわ――

王妃「それは何じゃ？」

「うん? これはオルゴールって書いて音楽がなる箱だな。」

「まあ……武器出しても良かつたけど……敵視されたくないし。」

」

・・・・・

王妃「では、本当に嫁探しなのだな?」

「まあ・・・

王妃「そつか・・・じやあ・・・ひかの娘はどうだ?・?・?

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
　　はあ? ?

14話 人生つていつも理不思・・・（泣）

――アリス視点――

お母様が、私はどうかとユウ様に勧めていますわ。

ユウ様は、驚いているみたいですけど・・・うふつう

お母様が味方についてくれて、協力して下さるのだから・・・

ユウ様は私のものですわ

――アリスアウト――

「ちょっとー待って・・・いきなり・・・」

王妃「まあ・・・知り合つたばかりと言つし・・・この城に住み考えてやつてくれないか？」

考えるのは、全然かまわないが・・・

「口に残るのはがまわないが……アリスとの事は、どうか分からぬがいいか？」

王妃「それで、いいです。」

王妃「それに……家臣の中にも娘をつと思つてゐるものもいるみたいだしな……」

別に、強制はしない。口に好きなだけ留まり相手を見つけると良い。」

結構……王妃ともな人なんだな。

「じゃあ、そうするわあ」

王妃「では、これにて……」「ユウ 今いいか?」

この声は……

「なんだ、ゼウス」

シユン

ゼウス「おうー···・ゴウ!」の状態は···・どうしたんだ?」

「この国の王族と知り合つてな・・・今
王妃と話していた。」

まあ・・・娘を嫁に進められたが・・・

ゼウス「…………」愁傷様「…………」

「……（泣）……」

・・・・・ ところで何の用だ?????・・・・・

ゼウス「おお・・・忘れるところだつたー！」

ゼウス「この世界の…………長い説明中…………。
・なんだが。」

「ああ、」この世界か、・・・うへへへん・・・

取り合えず・・・

パン

机とイスを出して

「ゼウス、その資料をよこせ後世界の玉だ。」

・・・ただいま・・・世界作り中・・・

「・・・っと、これでいいか?」

ゼウス「おひ。良じぞ。休暇中にはまんな

俺にしか出来ないから、仕方ないだろ？・・・

ゼウス「・・・まあな・・・お前以外できないからな・・・出来たら変わつてやるんだが・・・」

「仕方がないだろ？ 創造主になつた時点であきらめたよ。」

ゼウス「そつか・・・そついえば、神達が人間では無く、神の中から選んで欲しいと

俺に言つてきたぞ・・・まあ、言つて来た奴はお前のファンクラブの女ども

なんだがな

「・・・お前ならあの中から選ぶか？」

ゼウス「・・・すまん。」

「分かつてくれれば良いんだ（泣）」

ゼウス「まあ、良い人見つけたよ～。また来るな」

「またな。」

シュン

・・・帰ったか・・・うん?・・・何か忘れていたような・・・
!

そうだった、ココは王の間だった!

「・・・ええへへへつと・・・その・・何だ・・「そなたは、創造
主だったのか・・」

「へ?」

王妃「だから、コウ殿は創造主なのか?」

・・・・・・・・・・・さつきの会話駄々漏れ(^__^)・・・

「一様そうだが……」

王妃「そうか・・・まあいい。ゆうべつこの城に滞在してくわ

「おひへ。ありがとひ。・・・? ? ?」

王妃「では、この面会をおわる。」

15話 番外 王妃視点

ユウと言つ少年を見て、正直泣きそうになつた・・・

身体が心が全ての細胞が、この者が神だと認めている。

しかし、王である夫は頼りにならない・・・私がしつかりして質問しなければならない。

・・・・・ 13話 14話 であったこと。・・・・・

嫁探しか・・・わが娘が、ユウ様に恋している目だ・・・

取り合えず、援護射撃でもしといてやつたが。

ユウ様は、考えると言つだけだったが・・・

しかし・・・あの途中で現れた、ゼウスとか言つた者との会話から
創造主

と言つ言葉が出たが・・・

ユウ様が創造主だとすると、神の世界のトップだと言つことになる。

王妃「はあ・・・」

わが娘の初恋も前途多難だな・・・

王妃「しかし・・・貴族の奴らをどうしたものか・・・」

王「そうだな・・・」

あの面会が終わってから・・・貴族の者たちが煩かった。

仕方がないのかも知れないが・・・

王妃「奴らの考えてる事は、丸分かりだ。」

わが娘を神と結婚させ、わが血筋神の血をと企んでいる・・・

これだけならまだ良いが、国を我が物にと企んでいる奴も居てたち
が悪い・・・

王「そうだな・・・ユウ様も大変だ。」

王妃「ユウ様は、きっと分かつて居るのでしよう」

これから、大変だ・・・

王妃「あなたも少しつかりして下さい。」

王 一・・はこ・・・(泣)

16話（前書き）

王妃が、上から目線です……とありました。

国では、王妃が一番強いです……いろんな意味で……

王が人に流されやすい分、王妃が家臣や貴族達をまとめてるので、

上から目線でないと、なめられてしまつからです。

想いつくんですが、文章能力が低いのでうまくかけなくて（泣）

そのうひまく書けるよつこなるといいなあ……

王妃との面会が終わってから、（王はもうスルーっでいいよ。だつて空氣だし）

俺はあたえられた部屋にいった・・・が！

「なんで、アリスと部屋が繋がってるんだ・・・？」

アリス「／＼／＼・・・お母様やみんながユウ様のことが好きならそうしようと・・・」

「・・・アリスは本氣で俺が良いいの？」

アリス「はい。／＼／＼」

（ハハハ～～～～ん・・・ビラしたもんか）（惱）

アリスはかわいいし、綺麗でスタイルもいい、それに、俺のタイプでもある・・・

「・・・あのや・・・アリスは、俺が神だとか気にならないのか？」

アリス「???.」

嘘は嘘つてないな・・・

「・・・そりか・・・分かつた。」

アリス「???.」

キチンとアリスと向き合つてみるか！

「アリスの氣持ちは、分かつた。俺もアリスの事可愛いと思つし・・・

アリスとの事真剣に考えてみるよ。」

アリス「ほんとですか？」

「ああ。ほんとだよ。」

この選択が正解だったのか
・
・
・

アレから、王妃たちと食事をする」とこなつた・・・なのに・・・なぜ?

「王妃こねは・・・ビリコヒリ」と。

王妃「・・・いやなあ・・・貴族どもががつちの娘だけ、知り合ひ機会があるのは

おかしと言ひ出しね・・・取り合ひえず、王族だけでと書ひ事になつたのだ。

・・・すまん。」

・・・そういう事情なのはわかつたが・・・

「それにしても・・・なぜみんな娘を連れてきている者ばかりなんだ?・・・」

王妃「それは……ユウ様が、面会時に恋人もしくは嫁探しと言つたのを聞いた

者たちがわが娘をと……送つてきた……

「…………マジで……」

王妃「マジだ……」

「…………（泣）…………」

王妃「まあ……」それを乗り切れば、後は断る事も出来るから頑張つてくれ。」

「……なんかマジで泣きたくなつてきただよ……」

ホント困った……

男として、この状態は喜んだ方が良いのは分かっている……

・・・しかしだ!!

「ハハまだ多いこと……流石にイヤになつてへるわ……（泣）」

王妃「まあ……やつと見ただけでも50人は居るな……」

王「選び放題じや。いいの〜〜〜う……」

王妃・ユウ「「ハハまだつけてくだれこ」ひ。」

王「・・・（泣）オーナ」

「これ……全部紹介されて俺の身にもなつてくれ……紹介されたものだけならまだしも……

それに娘も居るんだぞ！50人どころではないだろ！1人に1人の娘と考えても100人は居るん

だぞ！・・・しかも紹介されている間、お宅の娘のアリスは、ずっと腕から離れず・・・

仕舞には紹介者の連れとにらみ合つたり、言い争つて居たんだぞ！
少しは助けろ！』

王妃「女の嫉妬やねたみは怖いじゃない・・・」

・・・・○――・・・・・

おれの味方は居ないのか・・・（泣）

ポン

うん？

王「・・・頑張れ・・・」

だめ王にまで同情された・・・（泣）

王妃「それに、アリスの事は大目に見てあげて。本気であなたが好きなのよ・・・」

それは分かつている・・・これでも創造主だから、相手がどんな人間で、どんな考え方

持つているか、いやでも分かつてしまつ。

「アリスの気持ちは、キチンと分かつてる・・・」

王妃」やうに、あの子の事よりじへむ

「あめ……悪こみひこせしなご。」

あの後・・・無事に拷問と言ひ名の食事会を終わらせ、

部屋に帰り・・・寝たはずだ・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・確かに寝ていたんだ1人で・・・

・・・・・・・・なぜココに・・・俺の布団にアリスがねている
んだ? ? ? ? ?

「おれ1人で寝たよな・・・・・・」

・・・しかし、アリスは可愛いな・・・

・・・俺が好きって言つてくれて・・心の綺麗だ・・・

このまま・・・アリスと添い遂げるのもいいな・・・

・・・もつ少しのままでいるか・・・

そうと、アリスを抱きしめもう一度寝に入った・・・

20話 食事会と魔女のお見合い・・・番外 1(前書き)

王妃は、神を信仰してないわけではありません。

ただ・・・王妃は怖いです・・・最強です・・・

この世界は、魔族エルフなどが居る世界ですので、どんな能力を持つて

居るかは、もう少ししたら使う機会や誰が何の魔族か出できます。

それまで待ってください。

私は、スズキ・ミナミ 16歳

父は、スズキ・バルト 王の右腕・・・右大臣をやっています。

今日は、父に連れられ宮殿に来たんですが・・・これは完璧お見合い大会ですね・・・

父「今日来たのは、お前に何としてでもあの方の恋人になつて貰いたいからだ！」

「????? あの方とはどなたですか？」

何処の誰とも分からぬ人と恋人になれなんて・・・有り得ないです！断固拒否です！

父「あの方とは、神だ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「？？？はあ？？？」

父「神であるユウ様が」の世界に・・・この国に降りられたのだ。

しかも、この国に恋人もしくは嫁を探しにこられている・・・

それにアリス皇女がユウ様にゾッコンでアタックしているみたいでな

・・・それに、他の貴族や王族がこそつてユウ様に娘を嫁にと

画策しているのだよ

・・・アリス皇女ですか・・・

「分かりましたわ！ユウ様がどんな方がどんな方が分かって良い方ならアタック

するでよろしいですか？！」

父「ああ。それで構わない。」

父「でもな・・・お前の嫌いなユリア嬢が乗り気で参戦しているぞ・・・」

あの馬鹿女が・・・

「あの女だけはいけませんわね・・・きつと阻止して見せますわ

！」

21話 番外2

私は、マツモト・コリアー6歳

父は、マツモト・サイト 王の左大臣職についていますわ。

いつもなら帰りが遅い父が、もう帰ってきて私を呼んでいるような
ので

父の書斎に来ています。

トントン

「お父様、コリアです。」

父「入れ。」

「失礼します。お呼びになられてとか。」

父「ふむ・・・実はな・・・・・・・かくかくしかじか・・・・・

と言つわけでユウ様のこと考えてみないか?」

神・・・ユウ様・・初めて神殿に行き自画像を拝見したとき感動して涙を流したのを

覚えていますわ。

「お父様・・ユウ様は・・・その・・・自画像通りの方なのですか?」

父「自画像通り・・・イヤ・・それ以上の方だ!」

それ以上・・・

「分かりましたわ。私本気でユウ様の恋人になりたいですわ！」

父「そうか・・・でわ、今晚夕食会があるから準備をしどきなさい。

「

「わかりましたわ。」

父「・・・そういうえば、右大臣の所の娘もくるみたいだぞ。」

・・・ミナミもくる・・・

「分かりました・・・」

ミナミには絶対負けませんわ！

22話 番外3（前書き）

最近・・仕事が忙しいのでペースダウンしてます(^ω^<・・)

土日に書きますので、許して〜〜〜！

22話 番外3

――アリス――――――

なぜこんな事になつたのでしょうか？

私はユウ様をお母様に会わせて……あわよくば……う
ふふう

・・はつ！・・・今何を考えていたのでしょうか？

話しあはる事1時間前・・・・・

ユウ様の面会が終わつてからしばらくたつた頃・・・

お母様に呼ばれましたわ・・・何の用でしよう・・・

もしかして、ユウ様と結婚

「入りますわね。お母様」

王妃「入りなさい。」

「お母様何の御用ですか・もしかして、ユウ様と結婚できるとかですか」「

王妃「んなわけないでしょう！」

「・・・・・」

王妃「いい加減にしなさい! お仕置をしますよ。」

「お母様一冊いづれもおせんべい」

王妃「はあ＝3・・・もう良いです。本題に入ります。

実は、ユウ様の恋人選びの事でな・・・「はい！私がなり」
黙りなさい「はい。」(泣)

その事で王族や貴族の者たちがアリスだけ知り合う機会が多いのは不公平だと意見が

あつてな・・・それで・・・言いにくいのだが・・今日食事会を開いてそこで

娘達をユウ様に紹介する事になつてしまつた。

22話 番外3（後書き）

もうすぐ女のバトルです！

女は怖いです（泣）

23話 番外終わり・・・ある意味修羅場・・・

-----アリス視点-----

いよいよ、ユウ様との食事会ですわ・・・果たして食事会と言つて良いのか・・・

「はあ＝3」

「何故こんなに居るのでしよう・・・」

ザット見ても、100人以上の娘がいますわ・・・ユウ様に張り付いておかなくてわ！

アレから1時間後・・・

ユウ様に張り付いてだいぶたちますわ。

しかし、・・・みんな始めは気乗りじやない様子だったのに、ユウ様を見てすぐ皿の色を変えて・・・色皿を使つてきましたわ！

・・・まあ・・・牽制しききましたけど

でも・・・今から来るあの2人は・・・曲者ですわ！！

バルト「始めてまして、右大臣をしております。スズキ・バルトと言います。

「おちは、娘の//ナ//ナ//です。もしよろしければ・・・

サイト「バルト」ユウ様は自分で選ばれると云つていただろうつ！余計なことは言つたな。」

「申し訳ございません。私は左大臣を勤めています、マツモト・サイトとおもいます

「おまかせは、娘のユリアです。」

ユリア「ユリアとおもいます。もしよろしければ、2人で……お話しでも／＼」

ミナミ「ユリアさん、抜け駆けはいけませんはー！」

ユリア「抜け駆けなんてしてませんわー！」

ミナミ「どうだか……おとなしそうに見えて、何考てるか……」

「

ユリア「何ですかー！」

・・・睨みあつてありますわ・・・この2人はいつも・・・

アリス「いい加減になさつたらどうですか?ー!ミナミさん、キッチンとユウ様に自己紹介なさつたら?ー」

「これで、話しあはれましたわ・・・

ミナミ「やうでしたわ！私スズキ・ミナミといいますわ。これから
ユウ様よろしくお願ひいたしますわ。」

ミナミ「それはそと・・・アリス様は何故、ユウ様の腕につかま
つているのですか？気分でも優れないのでしたら、どうぞお休みに
なられたら？私がユウ様のパートナーをいたしますから！」

アリス「なつ・・・・・氣分など悪くありませんわ！」

こうして永遠と一時間アリスとミナミとユーリアの戦いがあつたのだ
つた・・・・

「ウ「女は怖い……関わらないうが良さそうだな……ほつと
居て王妃達のところでもいくか……」

24話 なんともある。。。 (前書き)

そろそろ、ペースダウノします。

修正しつつやるのぢゅこません。。。

24話 なんともまあ。。。

・・・・・ Z Z Z Z • • • •

・・・ん?・・・んん?何か騒がしい気が・・・

目を覚ますと・・・

・・・・・・・・・・・・・・

アリスの顔が目の前に・・・しかも何か悶えてる?・・・

「おはよう。アリス・・・」

アリス「あつ!・・・・・あつ・・・・の・・・・その・・・・

？？？？？

アリス「・・・・・／＼＼＼＼＼・・・・・

取り合えず起きるか・・・

「やついえば、アリスは何で俺のベットに入り込んだんだ？」

アリス「／＼＼そつ・・・それは、お母様達が・・・

「・・・・王妃達か・・・・」

あの王妃達ならなんでもやりそうだな・・・

アリス「でも、私は嬉しかったです／＼／だつて・・・抱きしめてくださいたんですもの／＼／」

アリス「／／／／・・・可愛いだなんて／／／・・・」

? ? ? ? もしかして声に出てた???

「／＼＼＼＼・・・え～～～つと・・・取り合えず、今日は訓練所にでもいくか。」

アリス「私も」一緒に良いですか？」

「お、う。」

25話 迷子？

「おい。アリスはいるだろ。」

アリス「ユウ様～～～（泣）」

そう言つてイキナリマリアが抱きついてきた。

「？？？どうしたんだ？ アリス。」

侍女「申し訳御座いません。ユウ様、本日はアリス様に予定を言いましたら、やらないと

申されまして・・・」

「・・・アリス。予定はチャンとなした方が良いぞー。」

アリス「そっ！のんな～～～！」

「つしてアリスと一緒に訓練所に行くはずだったが、作法やいろん
なお稽古があるとかで
執事や侍女達に無理やり連れて行かれた。

そして俺は と云うと・・・

迷子？

アリスの侍女達に訓練所への道を聞いたんだが。

「ハハセビリだ？」

「取り合えず人に会つまでも歩いていくか。」

こうして俺は、行かなければ良かったと後で後悔するのだった。

「あの～すみません。」

「？」「はい？」

ヒロがどの辺か訪ねようとした所・・

？？？「つなー、ゴウ様ー！」

俺のこと、知っているのか？

？？？「ユウ様がココに来てくださった。何と慈悲深き方だらう・・

「は？」

何か声をかけたらいけない人にかけてしまったみたいだな。

「ううう、」うつしては、居れません。神殿に参りましょう!」

「うううううう、神殿? うううううう!」

「ううう、「そうです。あつーーー自己紹介がまででした。私は、神殿で巫女をしております

フジモト ミサキ といいます。この度は神殿にお越しくださいまして實に

ありがとうございます。」

「うして断ろうと思つたコウであったが、言えるよつた隙はなく無理やり連れて行かれるの

であった。

「俺かみだよ・・・・(泣)

」

27話（前書き）

遅くなつてすいません。

仕事が忙しく、しかも夏ばてとダウンしてました。

また、少しずつ書いていきます。

なんだ？ この状況・・・

どんな状況かつて？！

神殿に連れて行かれたかと思えば、たくさんの人々

どうやら礼拝の儀式があるらしくみんな集まっていたらしい。

まあ ココまでは良いとしよう。

俺 イコール 神 といえば・・・

みんな俺見て泣き出す

挾む

好奇の目

欲情の目

どうやつて取り入ろうかと考えている者

こうじう時 神つて不便。

考えている事がモロ分かり

まあ、俺に取り入らうとしたり
いのに 弱みを握りたいとか出来るはずな

ご苦労な事で。

「はあ = 3」

も「うしした、ハラハラから出るか。

にしても、王や王妃に對して黒い感情を持つ影があるな・・・

一様 王達に忠告 しつくか。

27話（後書き）

もつすべ、悪魔のような神が出た来ます。

なあなあ～。

「ゼウス～。アヌナクル～」つぶやいて世界を飛び出しかけたが…

「バハハハハ…」

「ゼ、「良このではありますかんか?」

「ほんとか?」

「ゼ、「ええ…・・ただし、いろいろ書類など増えますがそれでもよろしくですか?」

「ああ～～～～～・・・・・ めざむへれこな。」

「ゼ、「ある。少しふりこないでほこまかね。」

「マジかー！ よつしゃ～～～～～～～～～～

こうして、新たな世界を作ることになったのであった。

そして・・・

「ゼ」・・・手伝ひといつたのは失敗だった・・・

29話 悪しき者の企み

とある屋敷

？？「神が降り立つてしまつた。。。」

？？女「そつみたいですわね。」

？？「・・・このままだと、計画が狂つてしまつ。何とか修正しなくてはならぬなあ。」

？？女「そんなに、狂わなくて済むかもしませんよー。」

？？「真か！ー。」

？？女「ええ。 私が神の花嫁になり、虜にしてしまえば・・・の計画は進むわ。

もしかしたら、もつと早く事は進むかも知れませんわよ。（笑）」

??.「お主のその美貌と肉体でか・・・」

??.女「ええ。」

??.「では、計画はそのまま進めておいた。お主が神に近づきやすむ
いように手配しておいた。」

??.女「では、計画通り・・・」

三〇四　心のこもる・・・

取り合へず、迷いに迷つた・・・

段々 イライラ してかたのド・・・

「アーリア～～～～。

・・・・めりだもアジヤ お縁あらないな～。

まあ、めぐらしからこし こいつか。

「 取り合へず、田の間 」

カチャリ

「 あー。」

王「うなーー！　ゴウ殿でしたか。」

「もしかして、驚かしてしまったか？」

王「やうですね・・・。いきなりドアが開いたので。」

「「ぬー」ぬー。いやーー！迷子になつてねー。」

王「やうでしたか・・・。では、部屋に案内するものを「あー話がある。」話ですか？」

「おーー。王妃　と 左大臣 右大臣も呼んでくれ。」

王「左大臣と右大臣もですか？」

「おー。今後のことでな・・・。」

王「それは、嫁「違うから」　違うんですか？」

「ねえ。」の国に元関わる事だ。

王「わかつました。直ぐに手配します。」

3-1話 これからのこと

「みんな集まつてもらひたのは・・・娘をもひつて・・・ちがうか
ら・・・」

みんな何で娘を俺の嫁にしたがるかな・・・はあ＝3

王妃「話といづのは?」

「ああ～。すまん考え方していた。」

「話といづのは、怪しい動きがあるのでね～。信用できる人に今後を考えてもらおうと思つて。」

王妃「怪しいいじきですか・・・」

バルト「信用できるとほ・・・私は感激です。ユウ様に認めてもらえて（泣）」

サイト「私もあります。（泣）」

王「よかつたな～（泣）」

この状態は何だ？？？

正直 気持ち悪い・・・いい年こいた中年親父の男泣き。

一人ならそこまでないが、3人となると。。。

王妃「いい加減にしなさい！！！」

「「「はい！！！」

さすが王妃だな。

しかし、右大臣も左大臣も王妃に頭が上がらないとは・・・王妃
恐るべし。

「話を戻していいか?」

王妃、「申し訳ござりません。続けてください。」

「怪しこ動きどこのは・・・・・」

「怪しい動きというのは、どうも王座を狙うものがいる。本来なら、狙おうと思つても

そう簡単にいかないものなんだが・・・。天界の者が関わっているのだ。」

王妃「天界のものですか！！ それは、ユウ様の敵ということですか？」

「いや・・・違う。敵ならそく抹殺出来る といふか今の天界は平和だ。みんな充実していて

そんなこと考える必要がない。 奴は・・・俺が人間の恋人を作るのが許せない・・・いや、

あいつは自分以外が俺の恋人になるのが信じられないのかもしれな
い・・・」

あこつとは、一度 お・は・な・し（調教）が必要だなー

王妃・大臣・王 「「「・・・・・・・」」

「？？？んん？ どうした？」

王 「こや。声にでていた・・・」

「マジでー?」

王 「はい。」

まあこいや。

王妃「それより、その者達はどうしますか？」

「天界の者については」いちで処理するが、どうせならまとめて罪でもはるか？」「

王妃「眼ですか？」

左大臣「それは？」

「んん？　ああ～。眼か？まあ・・・簡単」とだーー。」

あいつをただ捕まえるのは簡単だ・・・

あいつが納得する方法を考えないとな～。

「俺が、おとりになるか。 もしくは結婚相手が見つかつたと噂を立てるか。

そうすれば直ぐに、あいつらは尻尾をだすだらつ。」

王妃「噂ですか？ 噂を立てると後々大変なことになるのでわ？」

「大変なこと？」

王妃「ええ・・・。 下手なものを選びますと、後々収集が付かなくなりますし。

かと言つて本当の相手をといこましても・・・まだ決まってない
のでしょ?」

「ああ〜〜〜・・・確かにそれはありえるな。」

左大臣「王妃の言つと通りですな。尊になつた者の親族が、ユウ
様を盾に強気に

出てくる者や王を襲ひのする者、国を乗つ取つりとする者が出て
くるでしょ?」

それも有り得るな・・・

「じゃあ、取り合はずの話は保留でー。」

「あーーー。」

王「どうかしましたか?」

渡すの忘れてた。

「いや～。忘れるところだつた。これを王妃と王……」

王「いれは？」

「守護のペンダントだ。奴らの狙いは、王と王妃だからな、それを付けてれば王達に

傷を付ける事も殺すことも出来ない。」

王妃「いいのですか？こんな高価な物。」

「俺が作ったものだから、いいや。」

王妃 王 大臣 「 」 「 」 作 つ た ！ 「

「おう。これでも神だからな 」

王妃「もう何も驚きません。ところでユウ様、ユウ様のお眼鏡にかなつた方はいましたか？」

「 」 「 」 でそれ聞くか・・・

「まあ・・・いいかな～～つと思つ子はいた。」

王妃「そうですか。」

「取り合えず」の話は、また明日。 今日は解散

やつらがひと直ぐに元ボートにて部屋に帰った。

これから、ヤンデレがしてこなめます。

34話 なぜ「」とな事になつた? (前書き)

次回R15になるかも?
どうまでがR15?
よくわかんない・・・

34話 なぜこな事になった？

あれから部屋に帰り、疲れてので侍女頬み風呂を沸かしてもらつた。

フウ＝3

「今日も疲れたな～～。」

風呂に入り、これからのことについていろいろ考えていた。

「何と云つて、あの子に伝えたらいいのか・・・」

よく考えたら、今まで告白などした事もない。そもそも好きな「すらも出来た事がない

事にこだわらぬづいた。

「告白された事は有つても、した事がないもんな～。」

そつ考へてこるとその頃・・・

アリス「それは、本当ですか？」

侍女「はい。先ほど王や大臣らと会談中に、結婚してもいいなと思える子が出来たと……」

アリス「そつ……そんな。」

侍女「アリス様！」

アリス「私は大丈夫です。……少し一人にしてください。」

侍女「しかし……」

アリス「お願いです……」

侍女「わかりました。」

パタン

侍女が部屋から出て行つて1人になった。

「ユウ様私ではだめなのですか？」
「どうしたら、私を好きになつてくれるのですか？」

「アーティストの心」

II-II-II-1 時間経過 II-II-II

「諦めるしかないのでしょうか・・・」

「でも、本当に諦めれるの？」

――――――
2 時間後――――

侍女「姫様、お食事はどうされますか？」

侍女「?????姫様?」

「何? 食事? ハハで食べるわ。部屋へは」んで。

侍女「はい。？？」

＝＝ 3時間後＝＝

「既成事実を作ってしまえば、ゴウ様も私を愛してくれますわ。」

「あつとー。あつよー。」

「パツとでてきた。女なんか直ぐに忘れますわ」うふふふふう・・・

「あつとあつですわ。」

＝＝＝その頃ユウわ＝＝＝

ぞわあ

「何だ今の寒気は・・・・

「さつきお風呂に入つて温まつたはずなんだが・・・・。」

湯冷めでもしたか？今日はもう寝よう。アリスには明日告白しよう。

「

こうして噛み合わない二人の想いでした。

三五話 えいじゆうじゅうじい(福地也)

R15です。

何かお腹の上が重い・・・

そのせいで目が覚めた俺・・・そこにま。

衣服を何も着けずにいるアリスがいた。

「なっ！…何しているんだ！」

アリス「何って。何するためですよーー？」

「なっ！」

アリスにいつたい何があつたんだ？？？

今朝までは、いつもと変わらなかつたんだが。

「アリス落ち着いつな？」

アリス「私は落ち着いてますよ。」

どうする？！！！俺！！！

好きな女が裸で迫つてくるといつのは、こんなに辛い物なのか・・・

「アリスどうして、こんな行動にてたんだい？」

アリス「え？？ だつて結婚するんでしょう？ならいいじゃないですか。」

「結婚て？」

アリス「そんなの決まっているじゃないですか ¥¥¥¥

決まっている？

何か可笑しいぞ。

俺は、明日アリスに告白するつもりだったはずだから、まだ告白も何もしていない。

「アリス、そんな事より、早くお子を作りましょウ?」

「アリス、チヨシヒ待て。」

アリス「??何でですか?私じゃあ駄目なんですか?そんな・
・そんな・・・

そんなのつて・・・」

「アリス?」

アリス「絶えられない~~~~~!~!~!そしたら一緒に死んで~
~~~~~。」

と言い襲い掛かってきた。

「アリス落ち着け! 結婚するならマリアとするから!」

そう言つた途端、暴れるのをやめた。

アリス「ほんと?」

「ああ。ホンとだーー！」

「取り合えず話すから落ち着いてくれ。」

アリス「はい。わかりました。」

そう言つて、裸のまま俺の大事なところに座るのだった。

「アリス取り合えずこれを羽織つて。」

好きな女が裸で、あんなところに座つているのもつらい

そつぱつと、何の事が分からぬのか。

自分の体を見て絶句したアリスだった。



### 36話 大変です。

「取り合はず、今回の事の説明をするが」

アリス「はい。」

「『』で嫁の話しを聞いたんだ？」

アリス「それは、もちろん侍女に盗み聞きせたんです。」

お~お~・・・ 大丈夫か？

侍女が盗み聞きできるほどに、警備がなつてないのか？

「盗み聞きはよくな~いぞ！」

アリス「はい・・・」めんなさい。」

「反省していればいいんだ。盗み聞きするぐら~いなら、俺に聞けば  
よかつたんだ。」

今度からそうしない。」

アリス「はい。」

「まあ。それはいいとして・・・今回王妃達と話していたのには他でもない。

邪な考えのモノがいてな。それについて話していたんだ。」

アリス「そうなのですか・・・。でも、そこでなんで嫁の話しが?」

言つても大丈夫なのか?

さつきの状況から見て、いつたら駄目な気がするのは・・・気のせいか???

アリス「言えない事なのですか?」（涙目）

その顔は・・・卑怯だろ!!

もしかして、俺の理性を試してるのであるのか???

そうなのかな???

「いや・・・言いにくいんだが、その王妃達に邪な考えをしている者の近くに

天界の者が協力しているんだよ・・・。」

アリス「そうなのでですか。」

「ああ・・・そ、うなんだよ。」

よし、これで終われるぞ。

アリス「だからといって、何故嫁なのですか？？もしかして・・・おんなですか？？」

「え～～～～つと・・・そのだな」

アリス「そうなのですね！？」

観念するしかないな。

「そりなんだ。あいつは、自分が俺の嫁に相応しいと思へ込んでいたな・・・

何度も断つたし・・・まず、タイプじゃないしな。」

アリス「・・・・・ぶつぶつ・・・ぶつぶつ・・・」

「アリスどうしたんだ？？」

様子がおかしいぞ？？  
怖くなつたのか？

「アリツ 「敵・・・」」

？？？

アリス「私の敵ですね！ ユウ様と私の愛に入り込もうなんて！！

殺す・・・・・・」

「アリス？？」

アリス「安心してください！ 私達の愛に入り込めませんわー！ そう  
ですわよね？！..！」

「ああ・・・ そうだな・・・」

なんだ？？」の気迫は。

取り合えず、落ち着かせるためにならねるか。

「もう、夜も遅いしねるか。」

アリス「はい」

「??アリスは自分の部屋で寝るんだぞ。」

アリス「嫌です！一緒にいいです・・・黙目ですか？？」  
（涙目）  
ウルウル

・・・・・だめだ・・・

「わっ・・・わかつた。」

アリス「やつた～～～」

こうして、一緒に寝ることになったのだが。  
もうもう、明日後悔するのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0589m/>

神様の頂点～創造主になってしまった少年～

2011年7月24日12時44分発行